

奥の細道

まつお ばしう
松尾芭蕉

那須野

那須の黒羽¹といふ所に知る人あれば、これより野越えにかかりて、直道²を行かんとす。はるかに一村³を見かけて行くに、雨降り日暮るる。農夫の家に一夜を借りて、明くればまた野中⁴を行く。そこに野飼⁵ひの馬あり。草刈る男⁶に嘆き寄れば、野夫⁷といへどもさすがに情け知らぬにはあらず。「いかがすべきや。されどもこの野は縦横に分かれて、うひうひしき旅人の道踏み違⁸へん。あやしう侍⁹れば、この馬のとどまる所にて馬を返し給へ。」と、貸し侍りぬ。小さき者二人、馬の跡慕ひて走る。一人は小姫⁶にて、名を「かさね」といふ。聞き慣れぬ名のやさしかりければ、かさねとは八重撫子⁷の名なるべし。曾良⁸やがて人里に至れば、価⁹を鞍壺⁹に結びつけて馬を返しぬ。



5

10

1 那須の黒羽 現在の栃木県大田原市。

2 直道 まっすぐな近道。

3 見かけて めあてにして。

4 野飼ひの馬 野原で放し飼いにしている馬。

5 野夫 田舎の人。

6 小姫 小さな女の子。

7 撫子 秋の七草の一つ。夏から秋にかけて薄桃色の花が咲き、花びらの先は細かく分かれている。

8 曾良 河合曾良（一六四一—一七〇〇）。この旅に同行した芭蕉の門人。

9 鞍壺 鞍の、人がまたがるところ。